

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320082

研究課題名(和文)中国語文法史の歴史的展開 構文と文法範疇の相関的変遷の解明

研究課題名(英文)Historical development of the Chinese Grammar; Investigation of its Correlative Changing Processes of the Grammatical Constructions and Categories

研究代表者

大西 克也(Onishi, Katsuya)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：10272452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、異なる時代の中国語を専門とする4名の研究者が、現代中国語に関する理論的研究成果を踏まえ、文法範疇と構文とが相互に関係しながら形成されていくプロセスを多方面から解明することをめざし、多くの成果を挙げた。とりわけレファレンス範疇ならびに存在構文、数量構文の変遷に関する研究は、従来の常識や通説を覆す成果であり、歴史言語学の方法論に対しても大きく貢献したといえる。

研究成果の概要(英文)：In this project, four researchers studying Chinese grammar in different periods, cooperated and aimed to investigate correlative changing processes of its grammatical constructions and categories by referring to theoretical results of research of the modern Chinese grammar, and made a lot of achievement. Particularly our study produced result to overturn general knowledge about formation and transition of referential categories, the existential constructions, and numeral-classifier constructions, and thus contributed greatly to methodology of the historical linguistics.

研究分野：中国語学

キーワード：言語学 歴史文法 構文 文法範疇 レファレンス 存在 概念 実体

## 1. 研究開始当初の背景

(1)1990年代以来の現代中国語文法に対する理論的研究の深まりを背景として、その成果を中国語文法の歴史的研究へ適用する模索が、今世紀に入って日本・中国・欧米を問わず胎動している。生成文法はもとより、認知文法、構文文法、結合価文法、談話文法、言語類型論等様々な角度からの分析から、現代中国標準語文法に関する知見が著しく深まった現在、それらと古代中国語や方言における相違と共通性を見極め、その形成される由来を探究しようとするのは中国語文法研究のあるべき一方向を示していると言える。

(2)しかしこのような最先端の文法理論と膨大な歴史的文獻とを総合的に扱う研究手法には、現実には大きな困難が伴う。特に個人で取り組むには困難が大きく、歴史文法研究者が主体となる場合には理論の誤解や認識不足、現代語研究者が主体となる場合には歴史的な言語事実の把握が不十分で、研究結果に疑問符がつくことがあるのも現状である。今日的な意味での中国語文法の歴史的研究は、いまだ萌芽期にあると見て相違はない。

(3)平成16年度から始まった木村英樹を代表者とする科研プロジェクト「中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構築—」(基盤研究(B)16320049、平成19年度より基盤研究(B)19320057)は、現代中国語研究の成果を還元しつつ中国語文法史の再構築を目指してこれまでにない研究体制を敷いた、画期的な試みであった。中国語史は通常上古、中古、近代、現代の4期に分けられるが、現代と上古では顕著な相違が存在する。各時代の文法を専門とする代表的な研究者がそれぞれの研究成果を突き合わせて検討することにより、変容の過程の解明を目指したのである。

(4)本研究課題は、上記プロジェクトの成果と総括の上に立ち、「構文」と「文法範疇」の歴史的展開が相互に及ぼす作用をより立体的に解明することを新たに目指すものとして構想されたものである。中国語文法の歴史的研究は、文法化への関心の高まりとともに活況を呈しているが、なお単独の構文を取り上げる研究が主流であり、文法範疇自体の形成プロセスや、構文の歴史の変遷との関わりを目指す研究は稀有であり、極めて意義深いものと言える。

## 2. 研究の目的

(1)二千年を超える文獻の歴史と豊富な方言を有する中国語は、歴史言語学にとって奥行きと幅をもった時空におけるデータの得られる世界的に見ても稀なコーパスである。本研究は、上古から現代にいたるそれぞれの歴

史時代を専門とする研究者の協働の下に、中国語の構文の形及び意味の変容を、各構文を構成する名詞項や動詞に関わる文法範疇の成立や展開との相関性から観察・分析することにより、歴史言語学一般への貢献をも視野に入れつつ、中国語文法史をより立体的に解明することを目的とするものである。

(2)本研究では、現代中国語文法において有効に機能している様々な文法範疇について、それらの範疇自身が歴史上どのように文法(構造)化され、どのような展開を遂げてきたのかを明らかにする。例えばレファレンスの体系における、定(definite)、不定(indefinite)、総称(generic)などの各範疇は、現代中国語における名詞的成分の形式や振る舞いと深く関わっており、例えば主語は必ず定でなければならないというのが一つの常識的な認識になっている。ところが不定の名詞が形式的なマーカーを持たなかった上古中国語において、不定の主語は、現代語に比べて遥かに高頻度で出現する。このような大きな違いがどのような経緯を経て形成されてきたのかを、各時代分野を担当する研究者の協力の下で通時的に究明する。このように、各時代領域ごとの比較を中心に、地域領域をも念頭に入れつつカテゴリーの相違を比較検討することにより、文法範疇そのものの歴史を解明することを目指す。

(3)同時に、文法範疇の形成と構文変容の相互関係の解明を試みる。従来 of 文法史研究は、例えば使役構文、受身構文等、構文を単独で取り上げ、その歴史を詳細に描写するという点では相当の蓄積と成果を収めてきた。しかし、言語は様々な構文と文法範疇とが織りなす共時的なパラダイムとして存在する。言語を突き動かすパラメータを解明するためには、構文を単独の現象として見るのではなく、それを構成する動詞や名詞項に関与する文法範疇や、構文相互間のネットワークを視野に入れた重層的な解析が不可欠である。

(4)本研究は、構文と文法範疇とを別個に扱うのではなく、相互に影響しつつ各時代領域、地域領域におけるパラダイムを形成してきたとの認識のもとに、中国語の文法の変化のメカニズムをより総体的に解明することを目指す点に、これまでにない独自の意義を持っていると言える。

## 3. 研究の方法

### (1)役割分担

本研究は4名の異なる時代の中国語を専門的に扱う研究者の協働によって中国語の文法史を解明するという点に特色がある。そのため、現代中国語文法、日中対照文法論を専門とする木村は、理論言語学、言語類型論、認知言語学などから得られる各種構文と文

法範疇に関する理論的枠組みと、自らが手がける現代中国語文法の研究成果を提供することにより、現代中国語と古代中国語の違いを顕著に浮かび上がらせ、研究の糸口を提供する役割を果たした。大西は研究の起点となる上古中国語（先秦から秦漢）の分析を担当し、現代と上古との間に横たわる大きな溝を的確に把握することにつとめ、また代表者として年度毎における重点事象を提案選定するなど、統括的な立場から研究を推進した。松江は中古中国語（後漢から隋唐）、木津は近代中国語（宋元明清）の資料分析を担当し、前後の時代の中国語との差異の由来を記述し解析することに力を注いだ。

## (2) 分析対象と作業内容

構文と文法範疇を同時に扱うには多量の例文を扱う必要があることから、伝世文献や現代中国語については大規模電子コーパスを主な分析対象としたが、歴史的資料については同時代資料としての竹簡、帛書、金石文、敦煌資料などの出土資料を併せて使用し、また元刊雜劇、古本『老乞大』、明清官話課本などできるだけ同時代性を保ち、口語的特徴を有すると考えられる文献を特に重視した。現代語についてはインフォーマント調査も行った。各研究者の成果を持ち寄り検討するための研究会を毎年2回以上行い、議論の客観性と精密化を確保するため、外部の研究者も招いた。各研究者は国内外のシンポジウムに積極的に参加し、成果の発信と学術交流の深化を図った。

## 4. 研究成果

本研究では中国語の各種構文の変容と各種文法範疇の形成の相関的なプロセスを、各時代間の資料を利用して多方面から実証的、理論的に検証し、中国語文法史をより立体的に究明することに結び付く成果を挙げることができた。とりわけレファレンス範疇ならびに存在構文、数量構文の変遷に関する研究は、下記に述べるように従来の常識や通説を覆す成果であり、歴史言語学の方法論に対しても大きく貢献したといえる。

(1) 中国語のレファレンス範疇について、主として不定を中心に通時的な検討を行い、以下のような重要な知見が得られた。

① 現代中国語では不定名詞は原則として主語に立つことができず、不定の行為者は動詞「有」と数量構文によってマーキングされる。しかし上古における「有」の使用は、行為者に対する文脈における際立ちの付与という語用論的な要因によって動機づけられており、不定というレファレンス概念は上古において文法的には範疇化されていなかった。

② 「不定」が文法的に範疇化されはじめるのは上古後期から中古にかけてであった。動詞「有」は上古後期以降語用論的な意味での際

立ち付与機能を消失する一方、実空間を占める未知の事物の存在を述べ立てる「有」字空間存在文の形成を背景として、「有」の機能が語用論的な際立ちを与えずに単なる存在を表す、即ち不定行為者の導入へとシフトしていった。

③ 唐・五代の頃になると、不定と数量構文との間に重要な変化が観察される。数詞については、特に「一+NP」が上古において保有していた計数機能が弱化し、個別性の際立ちを付与して後継性を確保し、不定表現における出現頻度を高めていく。その一方で、この時代に増加する「数+量+NP」については、不定表現に用いられた場合、NPの属性を焦点化して記述することに重点があり、「数+NP」に比べて言い切りになるケースが特徴的である。「数量」構文が必ずしも当初から不定表現に対応した形式ではなかったことが確認された。

④ 中国語において汎用的な量詞「箇」は、南宋時代までは基本的に「一」以外の数詞と共起することが少なく、計数機能が未成熟であること、「一箇」の機能の中心は当該文脈において「人」が付与されている属性に輪郭を与えることであり、「一箇人」は基本的に不定指示を表わさないことが確認された。このことによって、「有+数量」による不定行為者のマーキングは、「箇」の計数機能が成熟する明清時代まで降ることが明らかになった。

⑤ 中国語の「量詞」は、これまで計数機能を基本とするように認識されてきたが、歴史的に「数+量+NP」の語順を原則とするものは、名詞の属性を際立たせる「類別詞」としての機能が先行していたことが明らかになった。これは、いわゆる「量詞」の基本的性質の理解に根本的な転換をもたらすものと言える。

(2) 現代中国語におけるレファレンス範疇を再検討することにより、中国語における様々な文法範疇において縦断的に機能している高位の文法範疇を設定し得る見通しが得られた。即ち、現代中国語のレファレンス範疇における形式上の有標（不定）と無標（総称等）との対立は、意味的には実体と概念の対立に対応していると捉えなおすことが可能であり、このような組織的な対立が、範疇的属性を表す性質形容詞（無標）とアクチュアルな実体を表す状態形容詞（有標）との対立、個別具体的な行為を表わしえない無標の動詞と実空間における実体的な行為に言及する動詞の重ね型との対立など、個々の文法範疇を超えた汎範疇的な対立であることを多方面にわたって検証し得た。〈（無標＝概念）対（有標＝実体）〉という対立が、中国語を支配する原理的レベルでの文法範疇として設定し得るという考え方は、中国において伝統的に認められる「虚」と「実」という二項対立と相似形を為すものであり、文法史を記述する際の理論的な支柱となる可能性が認

められる。

(3)現代中国語における「有」存在構文は、「時空間存在文」とも呼ばれ、既知の特定の時空間に存在する未知の事物の存在を述べ立てる構文である。しかし歴史的に見ると、時間存在文と空間存在文は必ずしも一体ではなない。時間存在文は、空間存在文の成立に導かれ、上古以来文頭を定位置とした時間詞が、空間に対するメタファーによって主語と再解釈されることによって成立したものであり、その成立は、上古後期に成立した空間存在文にやや遅れる中古期であることを明らかにした。

(4)現代中国語と古代中国語における二重目的語構文を考察し、構造と意味との関連性において大きな違いがあることを明らかにした。現代中国語においては、授与類の二重目的語構文は非対格的な特徴を持ち、取得類は非能格的特徴を持つとされる。どちらを二重目的語構文のプロトタイプと見るかはこれまで定説がなかったが、上古中国語においては両者に構文的な差異はなく、ともに非対格的な特徴を持ち、授与類と取得類との対立は中古以後に形成されたことを明らかにした。

(5)中国語と日本語との比較を通して、客観的現実を言語化する際の中国語話者の慣習的な「視点」の取り方の問題を考察し、空間認知や事態認知の言語化に当たって、日本語話者が現場立脚型の当事者の視点を選択する傾向が強いのに対して、中国語話者は俯瞰型の傍観者の視点を選択する傾向が強いという事実を論証し、現実を言語化する際の視点に関わる個別言語固有の傾向差を明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 28 件)

- ①大西克也、中国語における指示性範疇化の胎動、『中国語学』261号、5-25頁、日本中国語学会、2014年、査読有。
- ②木村英樹、「指称」の機能——概念、実体および有標化の観点から、『中国語学』261号、64-83頁、日本中国語学会、2014年、査読有。
- ③木村英樹、こと・こころ・ことば——現実をことばにする「視点」、『人文知 1——心と言葉の迷宮』、97-118頁、査読無。
- ④木津祐子、不定指称としての“一箇”成立前史——『朱子語類』の場合——、『中国語学』261号、44-63頁、日本中国語学会、2014年、査読有。
- ⑤松江崇、唐五代における不定名詞目的語の数量表現による有標化——敦煌変文を主資料として——、『中国語学』261号、26-45頁、日本中国語学会、2014年、査読有。

⑥大西克也、上古漢語“奪取”類双及物結構研究、『語言学論叢』第49輯、41-65頁、商務印書館、2014年、査読有

⑦大西克也、上古中国語における不定行為者表現と裸名詞主語文に関する試論、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、213-233頁、白帝社、2013年、査読無。

⑧木津祐子、“有”構文の初出導入機能から見た『山海経』各経の内部差異、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、276-296頁、白帝社、2013年、査読無。

⑨松江崇、上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、474-494頁、白帝社、2013年、査読無。

⑩楊凱榮、漢語表達功能対“了”的使用制約、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、88-106頁、白帝社、2013年、査読無。

⑪飯田真紀、広東語の“有/冇V到”構文——“到”の機能と文法化・機能拡張——、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、157-176頁、白帝社、2013年、査読無。

⑫松江崇、《世説新語》中の“有”字句——以“空間/時間存在句”为中心、『中文學術前沿』第5輯、119-129頁、2012年、査読無。

⑬木津祐子、「官話」の現地化——長崎通事書の二重他動詞「把」と琉球通事書の処置文——、『京都大學文學部研究紀要』第51号、129-147頁、2012年、査読無。

⑭木津祐子、『朱子語類』“有”構文における「存在」義、『東京大学中国語中国文学紀要』第14号、63-81頁、2011年、査読無。

〔学会発表〕(計 29 件)

①大西克也、「雅言」獻疑、第十屆通俗文學與雅正文學 語言與文字 國際學術研討會、2014年10月25日、國立中興大學綜合大樓十三樓國際會議廳(台灣・台中市)。

②松江崇、淺談不符合“聲調原則”的同義並列雙音詞的產生機制、第三屆漢語歷史詞彙與詞義演變學術研討會、2014年9月21日、花家山莊(中国杭州市)。

③大西克也、上古漢語「有」字存在句及其時間性質、漢語時間標記之歷史演變國際研討會暨第八屆海峽兩岸漢語語法史研討會、2013年11月18日、清華大學(臺灣・新竹市)。

④松江崇、談《舊雜譬喻經》在佛教漢語發展史上的定位、第七屆漢文佛典語言學國際學術研討會、2013年8月25日、貴州師範大學文學院(中国・貴陽市)。

⑤木村英樹、「視点」と表現、第5回日中対比言語学シンポジウム、2013年8月21日、福建師範大学(中国・福州市)。

⑥木村英樹、中国語の知覚・感覚・感情表現、日本言語学会、2012年6月16日、東京外国語大学(東京都・府中市)。

⑦木津祐子、《廣應官話》所反映的琉球通事學門體統以及現地化特點、第七回國際、第十二屆全國清代學術研討會、2012年11月18日、國立中山大學(台灣・高雄市)。

⑧松江崇、關於古漢語詞彙雙音化研究的幾點建議、第 62 回日本中国語学会全国大会、2012 年 10 月 27 日、同志社大学・京田辺キャンパス（京都府、京田辺市）。

〔図書〕（計 2 件）

①木村英樹、白帝社、『中国語の意味とカタチ——「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』、2012 年、347 頁。

②岩田礼、木津祐子、中西裕樹、鈴木史己、八木堅二、山本恭子、金湘斌、張勇生、劉慶、好文出版、『漢語方言解釈地図・続集』、2012 年、169 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大西 克也 (ONISHI Katsuya)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：10272452

### (2) 研究分担者

木村 英樹 (KIMURA Hideki)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：20153207

木津 祐子 (KIZU Yuko)

京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：90242990

松江 崇 (MATSUE Takashi)

北海道大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：90344530

### (3) 連携研究者

楊 凱榮 (YANG Kairong)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：00248543

飯田 真紀 (IIDA Maki)

北海道大学・大学院国際広報メディア・観光学院・准教授  
研究者番号：50401427